
魔術師と貴族 ～逃亡者は殺人鬼！？～

木城いるは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術師と貴族　　～逃亡者は殺人鬼！？～

【Nコード】

N9274E

【作者名】

木城いるは

【あらすじ】

魔法の類が廃れ始めている時代で、魔術屋を営むアステルナータ。彼女は相棒猫のレバンヌと、日々のんびりと過ごしていた。ちなみに仕事は一回も舞い込んでこない。ある日、一人の男性からの依頼により、彼女の生活は一変して——！？ファンタジックで時々ロマンティックな、魔術師アステルナータと貴族エディアルの物語。

TALES OF 【魔術師と猫】

夜も更けた街の裏路地に、足音が響く。青年は息を切らしながら物凄い速さで石畳を駆け抜けている。その足音が何重にも響き渡り、まるで何十人もそこに人が居るかのようだった。——否、何十人もの人が、青年を追いかけて同じ石畳を走っていた。

「まてっ！ この野郎っ！」

待てと言われて、待つ人間はそうそう居ない。青年は肩越しに後ろを振り返り、追っ手達を睨んだ。

「……フン、誰が……待つか」

青年は泥と傷だらけの四肢をこれでもかと言うくらい素早く動かし、ゴミ箱を踏み台にして二メートルはある石垣を飛び越えた。着地すると、青年の両脇に燕尾服姿で容姿が両極端な二人の召使いが現れた。

「こちらです」

右脇の召使いがそう囁き、青年は右の召使いの後について逃げる。左脇の召使いは青年の背後につき、時折追っ手が来ないか見張った。水がゆっくりと流れる音がこだまし、淡い光がひとりひとりの顔を照らしている。三人は迷わず裏路地を進む。その裏路地の横には結構な幅がある水路がある。水路が近くにあるせいか、悪臭が三人の鼻をついた。

「……」

青年が嫌そうに眉間に皺を寄せる。先頭を走っていた召使いは、少し助走をつけて水路を飛び越えた。勿論青年も後に続く。その後に少し遅れて後ろの召使いが飛び越えた。そのとき、はるか遠くから午前零時を告げる鐘を音が響くのが聞こえる。青年は安堵したかのようにその場に座り込んだ。二人の召使いも座り、息を整える。

「逃げ切れた——」

青年は、溜息と一緒にそう洩らした。

近年、機械化が進み魔術や魔法は驚くほどのスピードで衰退していった。科学的思考が人々の脳を魅了し、魔術師や魔法使いはお年寄りくらいしか残っていない。そのせいか、近頃魔法生物を見ることのできる人が減少した。それは新たな魔術師や魔法使いがごく僅かしか居ない事を暗に示しており、また要素は持つていても魔術師や魔法使いにはならないという世代だ。

そんななか、町では変人として有名なアステルナータ・ヴィゼツトは、高等学校を卒業してから自宅で“魔術屋”を営んでいる。魔法や魔術にかんしてならなんでも行うという、よろず屋に近いものだ。呪いや薬を調合したりして、風邪を治したりいい風を吹かせたりetc…。魔法生物とのトラブルも扱ってはいるのだが、魔法生物が見えないのにトラブルなんて起こるはずもなく、見えない存在である魔法生物と楽しそうに話したり遊んでいるアステルナータは変人、と印を押され町の人々からは遠ざけられているのだ。

よく晴れた日。アステルナータはいつものように庭で薬草の手入れをしてやっていた。その隣では黒猫のレバンヌが後ろ足で立ちな

がら新聞を読んでいる。

「アステル、今日も載っていなかったぞ」

レバンヌがアステルナータに見せたのは、広告欄だ。アステルナータは以前、一人でも魔法や魔術について困っている人が救えたらと思い、新聞社に“魔術屋”の広告を載せてほしいと頼んだのだ。勿論広告料は払った。だが、未だに隅にも広告が載っていない。アステルナータは新聞を見ていた目を薬草の方へと戻した。

「そんなもんよ、レバンヌ。明日も載っていなかったら、広告料を返してもらいに行きましょう」

アステルナータは、レバンヌから見てもおっとりとしている。だから、きっと明日も同じ事を言うのだろうと想像して、レバンヌは溜息をついた。

そんな光景を、後ろから郵便配達員が見ていた。手紙は指の間にかろうじて留まっている。配達員に最初に気がついたのは、レバンヌだった。

「おい、郵便みたいだぜ」

アステルナータは急いで立ち上がる。

「あ、おはようございます、郵便屋さん。べ、別に独り言を言っているわけではないの！　すぐ隣に黒猫のレバンヌが居てね、その子と喋ってただけなのよ」

その配達員はどうやら新人だったようで、手紙を強引にポストへと放り込むと一目散に逃げ出してしまった。ベテランならアステル

ナータの家なんて覗き込まず、ポストに郵便物を入れたらそつと行ってしまうのだ。

「あ……。私、今絶対変人だと思われたわ。レバンヌ、今度からあなた外出禁止にしようかな」

「おい、それはあんまりだろ。オレにも人権はある」

猫なんだから人権ではなく猫権のような気もするが、アステルナータはあえて言わない。向こうは自分のことを猫だと思っていないのだ。

「それより、お手紙見なくちゃ。薬草みててもらってもいい？」

レバンヌは新聞をアステルナータに手渡し承諾。アステルナータは先程郵便配達員がポストにねじ込んだ手紙をそつと取り出すと、庭にある椅子に腰掛けた。

しばらく手紙を読んでいたアステルナータは、雑草を器用に抜いているレバンヌを思いつき抱き上げた。

「な、な、なんだよアステル、急に！」

「朗報よレバンヌ！ 仕事の依頼がきたわ！」

レバンヌは目を丸くして手紙をふんだくった。

「嫌がらせか？ それとも冷やかしか？」

「手紙には、明日朝にお伺いしますと書いてあるのよ？ 嫌がらせ

なら内容しか書いてないとか、そんな感じじゃない？」

レバンヌは手紙をじっと見つめる。どうやら怪しい点は無かったようで、とてつもなく不服そうな顔してアステルナータに手紙を返した。

「ね？ 明日のために、色々準備しなきゃっ」

アステルナータは楽しそうにクルリと回り、鼻歌を歌いながら薬草の間に生えている雑草をいつも以上に丁寧に抜いている。レバンヌは呆れて家のなかへ戻ってしまった。

次の日。持っている中で一番キレイにしてある服と普段着ているローブを羽織ったアステルナータの目の前には、出された紅茶をのんびり啜っている依頼人の青年が座っていた。名前は手紙にも書いてあったが、マイク・サウザンというらしい。アステルナータはもう一度、依頼内容を確認しようと手元にある紙をもう一度読んだ。人を探す依頼で、その人の身体的特徴は、黒髪に碧眼、背はひよろりと長く、名前はニック・リー。

「ええと……人を探してほしい、ですよね」

マイクは頷く。

「無理ですか？」

アステルナータは首を横に振る。

「そういうんじゃないくて、こんなに身体的特徴がはっきりしているのに、警察じゃなくて魔術を頼るなんて今時珍しいなーって思ったんです。あと、居場所を特定するだけっていうのも」

マイクは苦笑した。

「あつ、でも詮索は致しませんから。心配しないでください」

アステルナータは両手を胸の辺りでブンブンと振る。マイクは腰を浮かして椅子に座りなすと、アステルナータの目の前に小切手を滑らせた。

「これは前金です。探していただいてもし見つからなくても、これは受け取ってください。探していただいたお礼という形で。もし見つかった場合はまた、お支払いいたします」

アステルナータが小切手を覗き込むと、そこには妥当とはいえない高額な金額が書き込まれていた。

「三百も、そんな……捜索料としては多すぎます!」

「いいんです。今時魔術師を頼る方もいらっしやらないだろうし、個人情報を守ってくださいるそうですし、高くはありませんよ」

きつとマイクなりの考え方があるのだろうとアステルナータは判断し、ありがたく受け取る事にした。

「それでは、明日までには捜索の呪いも効いてると思いますので。また明日、お越しください」

アステルナータがそう言って席を立とうとすると、マイクは険しい表情でアステルナータを睨みつけた。

「そんなに時間がかかるのですか？ 呪いなんてすぐに出来上がるでしょう。いまここでやってください」

アステルナータはそんなマイクの視線に気がつき、身をこわばらせた。

「え、いや、でも時間がかかると思いますよ……」

マイクはマグに残っていた紅茶を飲み干し、不敵に微笑んだ。

「私は魔術を信じていても、あなたという人間は信じていないのですよ。万が一のことも考慮して、私はここに居させてもらいます。いいですか？」

仮にも依頼主にそう言われ、アステルナータは言い返すことが出来なくなり、仕方なく呪いが終わるまでマイクに作業の見学を許した。

「——なあ、こいつ夜中も家に居るきか？」

「知らないわよそんなこと。でもレバンヌ、追い出すとかそんな野蛮なことはしないでね」

「アステルが許すまではしませんよ」

「おい、何と話してるんだい？」

マイクが干した薬草がしまつてある棚からアステルナータの方へと視線を上げた。アステルナータは必死でなんでもないことをアピールし、呪いに再度とりかかる。実はあと針を用意するだけなのだが、マイクが居ては取りに行けないような所……アステルナータの寝室にあるので、レバンヌにとって来るよう頼んだのだ。

「おい、取って来たぜ」

アステルナータはレバンヌから針を受け取り、お礼もそこそこにその針に呪いを込め、作った液体の中に漬けた。

「これで、呪いは完了です。あとは針が一人でに飛び出してきて地図に刺さっていくのを待ただけですが、今夜はずっと見てますか？」

アステルナータは不安になつてマイクに確認する。もし居ると答えられたら、アステルナータは夕食や服やベッドのメイキングまでしなくてはならないことになる。それはとても面倒くさいのだ。しかし、以外にもマイクは首を縦には振らなかった。

「いえ、それでは迷惑をかけるでしょう。私は近くのホテルに泊まっています。もし何か事態が急変したら、ご一報ください。では、失礼します」

マイクはそう言うと言つて出て行つた。アステルナータは溜息をついて、自分のために淹れた冷めた紅茶を飲み干した。

「ふう。これでひとまずは安心ね。レバンヌ、お夕飯の支度をしましょう」

「いいぜ。あ、そうだアステル。あのマイクって人、意外と警察かもよ。探してる奴、指名手配中の殺人鬼だ」

「え？ …… またまた、レバンヌったら冗談好きね」

「冗談じゃねえって。新聞の一面見てみるよ」

アステルナータは受け取った新聞を見る。すると、たしかに殺人鬼がロンドン郊外に出没したとのニュースが大々的に取り上げられていた。身体的特徴は、黒髪に碧眼、背はひよりりと長く名前はニツク・リー。確かに依頼と一致している。

「つまり、ワラにもすがりたいって訳ね」

アステルナータは呪いを実行中の針の入った液体へとかける。探す時の基準として“殺人鬼”を加えたのだ。すると、今まで決めかねていたのが解決したかのように、針は液体の中から飛び出し地図に刺さった。

「見てレバンヌ！ 探す時の基準に“殺人鬼”を加えたら、あつという間に特定できたわよ！ …… でもあれ、おかしいわね…… マイクさんの居るホテルに刺さってる……」

「どういうことだ？ まさか奴は自分を探してほしいわけでもないだろう？」

「そうよねえ…… 呪いが上手く作動しなかったのかしら」

「いや、その呪いとやらは上手く作動しているよ。しかも正格にね」
突如玄関の方から、青年の声が聞こえてきた。アステルナータは急いで玄関へと向かう。そこには、傷と泥だらけの青年と燕尾服を着て両極端な容姿を持つ召使いが立っていた。

「あの、どちら様……？」

アステルナータが訊ねると、青年自らが名乗りだした。

「僕はエド。エディアル・ランサー。肌が黒い方がフォック。肌が白い方がセキレイ。よろしく、アステルナータ・ウィゼットさん」

エディアルは青い瞳でそう挨拶する。黒い髪は泥で汚れている。背はひよろりと長い。しかし名前が違う。彼はエディアル・ランサーと名乗った。

「あの、ミスター・エディアル。それで呪いが正格だっていうのは、どういう意味なの？」

アステルナータは呪いによって針の刺さった地図を指差す。エディアルはしげしげとその地図を眺め、針の刺さっているホテルの真ん中に刺さっている針を少し触ってみたりした。

「殺人鬼はマイクという男、という意味だよ。だが、探されていたのは僕だ」

エディアルはきょとんとしているアステルナータにわかりやすいよう、人差し指を自分の顔に向けた。

「え、でも、ミスター・エディアル。探し人の名前はニック・リーなのよ？ あなたはエディアル・ランサーじゃない」

今度はエディアルがきよとんとする番だ。アステルナータは依頼の紙をエディアルに見せる。エディアルはしばらく興味深げに紙を読んでいたが、唐突にアステルナータへ紙を返す。

「これは、僕の条件と合っているようで合っていないな。まずニック・リーというのは偽名だ。ひょろりと背が高いのは認めるけれど、瞳も髪の色も変えてあるし」

「色を変えてある？ それって、染めてたりしてるって事よね？」

エディアルは頷き、少しシャワーを貸してほしいとアステルナータに頼んだ。アステルナータは承諾し、着替えなどは父のお古を用意した。そしてエディアルが浴び終わるまで、物静かな召使い二人とアステルナータは、居間で気まずい空気を感じていた。

（向こうは召使いなんだから、きっと私に気安く話しかけられないのよ。でも、こっちから話しかけるのも、なんか悪い気がするし。あーもう、気まずいわね……）

結局、アステルナータはエディアルが戻ってくるまで一言も話しかけることができなかった。

「……呪いを解いてほしい？ その髪と眼の色は、呪いで染めてた

の？」

「ああ。正格には染められていた、けどね。それと、僕らにかけられている追跡の魔法も解いてほしいんだ。これがあるせいで、僕はいつまでも殺人鬼と間違えられて終われる羽目になる」

アステルナータは次々と舞い込んでくる仕事と、その突拍子の無い内容について、しばらく頭を悩ませた。

「色くらいなら、簡単に解けるわよ。でも……追跡の魔法は強さにもよるわ。今完全に解けるっていう保障はできない。それでもいいかしら？」

エディアールは頷く。そして、フォックがおもむるに取り出した小切手に、なにやら数字を書き出した。どうやら仕事料のようだ。

「これは仕事料。追跡の魔法の分も入ってるよ。もし万が一今解けなくても、後で解く事もできるだろう？」

そう言ってエディアールがアステルナータに手渡した小切手に書かれていた数字は、八百。

「今日は揃いも揃って高額な仕事料ね。実際はたいした事無いのに、ミスター・エディアール、八百だと多すぎるから、三百くらいで手を打たない？」

エディアールはまさか減らす事を提案されるとは思っていなかったよ。突然笑い出してしまった。

「君は……あはは……欲がないのかい？……クッククック……五百も下

げてくれなんて！ それじゃあ僕の気持ちが良くないから、五百で手を打ってくれるとうれしいな…あっはっはっは！」

その後、アステルナータがいくらもう少し下げてくださいと言っても、エディアールは笑うばかりで聞く耳をもってくれなかったので、仕方無くアステルナータは五百で手を打つことにした。

しばらくして、エディアールの笑いも治まった頃。アステルナータは煮た薬液を、タオルにしみこませてエディアールの髪の毛を濡らした。すると、濡らした所から髪の毛が元の色を取り戻していく。エディアールの髪の色は、輝く金だった。すこしオレンジがかっているのが、またキレイに輝いている。そして眼の方は、薬液を水で百倍薄めたものをボウルに注ぎ、その中にエディアールが顔を突っ込んだ。水溶液の中で眼を開けると、碧眼だった眼が血のような紅色に戻っていく。エディアールが顔を上げたら、完璧に呪いが解けていた。

「……あ、キレイ……」

アステルナータが思わず見とれてしまうほど、エディアールの金髪と紅色の眼は美しかった。

（それに比べて私の髪は赤茶色だし、眼は緑色だし）

アステルナータは思わず自分のものと比較してしまうのだった。

「どうだい、戻っているか？」

エディアールはエディアールで、色が戻った事が嬉しいらしく、

フォックとセキレイに隅々まで確認させていた。心なしかフォックとセキレイも喜んでいるように見える。

「あ、じゃあ私、追跡の魔法を解く方法を探してきます」

三人の環の中に入り込めないアステルナータは、逃げるように書庫へと駆け下りていった。

「なんだか臭うな、あの男」

書庫には、レバンヌが先客として居た。レバンヌの周りには読み漁られた分厚い魔術書が積み重なっている。

「そうかしら？ まあ、マイクさんとなんか関係があるようだし。気は抜けないわね。それよりレバンヌ、なに調べてるの？」

「あの男の言っていた、追跡の魔法を解く方法。ちよいと興味が湧いたから調べてみたのさ」

アステルナータはレバンヌの仕事の速さに驚きつつ、積み重なっている本の一番上にあるやつを手を取った。

「やっぱり、高度の魔法だったわ……。完全に解くには、ちよつと特殊な薬草が必要みたい。とりあえず和らげる方法もあるみたいだけど……」

アステルナータが本を読み漁りながらメモをとっていると、レバンヌが薬草図鑑を持ってきてくれていた。

「アステル、オレの記憶が正しければ、その薬草はちよつとどころか、かなり特殊だぞ。昔はそこらへんの山でも自生していたらしいが、今は魔界の扉の近くにしか生えてないんじゃないか？」

レバンヌが、薬草図鑑を開き、前足である薬草を指差す。それはアステルが日頃慣れ親しんでいる薬草とは、外見が随分とかけ離れていた。

「なに、この茸と草の中間みたいな容姿。もしかして、だから名前がグリーンマッシュルームなわけ？ 微妙ね……」

そして生息地を探してみるが、年々数が減少しているのかレバンヌの言うとおり、魔界の扉に近い山奥にしか印がついていなかった。そして、アステルナータが住んでいる町から一番近い山は、直線距離で百キロメートル以上は離れていた。

「さすがにこれじゃあ、明日中つても無理っばいわね。それに、明日はマイクさんが来るし……。もう！ 私はどうすればいいのよ！ 素直にマイクさんに地図を見せるわけにもいかないじゃない！」

「なら、今夜逃げればいいじゃないか」

アステルナータが声に驚いて振り返ると、書庫の入り口にエディールが立っていた。

「衣類や身の回りの生活必需品は僕の方で用意するから、きみは旅行鞆にそれらの本を詰め込めば良い。僕らの準備はバッチリだ。寝台列車に乗っても、明日の朝には十分隣の都市には居る事になるよ。どうする？」

アステルナータが返事に困っていると、突然、レバンヌが声を發した。

「怪しいな、あんた。そんなすぐに準備ができるか？ 前もって計画していたんじゃないのか？」

アステルナータはどうせ見えないし聞こえないだろうとレイブンが喋るのを止めなかったが、エディアールの反応を見た瞬間、この性格の悪い猫が、自分の姿が見えるように仕向けていることがわかり、アステルナータは途端に額から汗が滲むのを感じた。

「ええと……お初にお目にかかります、エディアール・ランサーと申します。アステル、こちらの猫さんは？」

「あー、えーっと、レバンヌです。私の使い魔みたいな存在なんだけど……。あとミスター・エディアール？ 私のことを愛称で呼ばないで。まだ知り合って間もないし」

レバンヌは後ろ足で立ってお辞儀をする。レバンヌにつられて、エディアールもお辞儀をした。それからアステルナータのほうへと視線を向ける。

「一緒に旅に出るのは、かなり親密な関係な証拠だよ」

「私、まだ一緒に行くとは言っていないけど！」

「でも、一緒に行かないと僕からの依頼は達成できないよ？」

「うぐっ……」

エディアールは悪戯っぽくウインクする。アステルナータは、次第にエディアールに対して疑問や怒りの感情がふつふつとわきあがってくるのを感じた。

「……わかったわ、一緒に行く！　けど、親密な関係ではないから。そのところは妥協しないわ！」

エディアールは残念そうに肩を竦める。

「まったく、こいつ信用できないな、やっぱり。オレ見ても驚かないなんて」

レバンヌは不服そうにエディアールをにらみつける。

「以前にも似たような存在に会った事があるから、あんまり驚かないんだよ、レバンヌ」

レバンヌには、余裕をもったような笑みを浮かべる。

「やっぱ怪しいな、こいつ……！　アステル、こいつ信用しちゃだめだ！」

「失礼な。アステル、僕のことは信用してくれてかまわないからね」
アステルナータは仕方が無くといったかんじで分厚い本を抱える。
しかし、瞳はエディアールを鋭く見据えていた。

「仕事だから、仕方なく、なのよ。さっきまでの会話で、あなたがどれだけ軽い男か解ったしね」

夜もだいぶ更けてきた頃。旅行鞆を持った召使いと少女と青年は、馬車に揺られながら駅を目指していた。

TALES OF 【汽車と追っ手】

アステルナータは馬車の中で、先程空けてきた家のことに思いを馳せていた。

（ピクシー達はしっかり留守番ができるかしら。やっぱり無難なところでゴブリンにしておけばよかったのかも。でもそれ以上に、明日マイクさんが家をめっちゃめっちゃにしないかが心配だわ）

アステルナータは出かけ際、庭小人に薬草の手入れを、ピクシー達に家の留守番を頼んでいた。その光景を傍から見ていたエディアルは、終始「僕にはやっぱり見えないなあ」を繰り返していたが、アステルナータは気にも留めず、様々な代償と引き換えに交渉を成立させていった。

「アステル、そろそろフォックの呼んだ馬車が来るよ」

アステルナータの父親の服を、父親以上に着こなしているエディアルは、アステルの用意した旅行鞆の上に丸まっていたレバンヌの背中を撫でていた。レバンヌは不服そうな鳴き声を立てている。

「仕方が無い、猫のフリだ」

レバンヌは鳴き声の合間合間にそう呟く。そんなレバンヌに、アステルナータはせめて用事がある時以外は、自分の傍に離れない限り姿を消してもいいよと言い、それを聞いたレバンヌは、エディアルの掌をひよいと避け、暗闇にスッと消えてしまった。

「レバンヌは大丈夫なのか、アステル？」

「ええ、あの子はちゃんと私を見守ってくれているの。だから決してはぐれる事はないのよ。今だって見えないだけで、私の肩の上に乗っかってたりするんだから」

勿論、アステルナータにはレバンヌの姿は見えている。レバンヌはアステルナータの肩の上にしがみつき、エディアルを暗闇でも光る水色の瞳で睨みつけていた。どうやらレバンヌとエディアルは、馬が合わないらしい。

「そうなんだ。じゃあ、もしかしたら空を翔るペガサスも、君の瞳には見えたりするの？」

「まあ、たまにね。ここらへんじゃあ、もっぱら飛んでいるのはヒツポグリフとか。あと、海岸線に行けばマーピールだって居るんだから。……あ、ごめんなさい。こんな話するつもりはなかったんだけどね」

エディアルがずっとアステルナータの顔をまじまじと見つめるので、アステルナータは変人だと思われたのだと思い、すかさず謝る。けれど、エディアルはそれでも見つめていた。

「あの……？ 私の顔になにか付いてるの？」

「ああ、ごめん。ただ、君のきれいなエメラルドの瞳は、その色に合うような世界を見ているんだなーと思ってただけだよ」

さらりと、エディアルはそう言って、アステルナータの結われていない髪の毛を一房、指にからめた。

「この髪も、ただ見てるだけだと赤茶色なのに、きつと日に透かすとルビーのような赤になるんだろうね」

アステルナータは、呆然とした。それもそのはず。今まで一度もアステルナータの不気味な緑色の眼と、血が滲んだような赤茶色の髪の毛を褒める人間は居なかったのだ。だから、エディアルへの反応も、ワンテンポ遅れてしまう。

「あ……ありがとう。でも、よくこの色を褒める気になったわね。眼は魔女の瞳だと、髪の毛は返り血を滲ませて紅に近くなった赤茶色って言われるのに。……こんな色を褒めるなんて、あなた変わってるわ」

「そうかい？ そしたらきみも変わっていると思うな。僕に髪と瞳の色を褒められて、きみみたいに頬を赤らめない女性はそう居ないよ。——でも、そこが可愛いんだけど」

さりげなくエディアルの言葉を無視して、アステルナータは家の門の前まで馬車を迎えに行く。

「アステルはつれないなあ。レバンヌもつれないし。僕の味方は二人の召し使いつてわけか」

べつにそうでもないのだろうが、エディアルはわざとらしく溜息をつく。アステルナータはセキレイに荷物を預けるとエディアルを引っ張って馬車の方へと歩かせた。

「なんだいアステル。ああ、僕が可哀想になってかまってくれていいんだね。ありがとう。君は本当に心優しい女性なん——」

「いいからっ！ ほら、乗る！」

エディアールの言葉を遮って、アステルナータはぐいぐいとエディアールを馬車へと押し込んだ。そして、自分も登ろうとするが、入り口にエディアールが立っていて登れない。

「ちょっと、退いてくれる？」

「退くのは嫌だな。紳士たるもの、女性をエスコートしなければならぬからね」

そう言っただけでエディアールはアステルナータの手をとる。ここは我慢してやろうと、アステルナータは素直に登ったが、今度はアステルナータの目の前に、エディアールが座ってこう言った。

「こうすれば、君の顔がずっと見えるかな？」

アステルはもう我慢の限界に達して、わなわなと握りこぶしを震わせる。すると、助け舟を出すかのようにセキレイがペシリ、とエディアールの頭を叩いた。

「いて。ひどいな、セキレイ。仮にも主人は僕だぞ？」

「じゃあ、この瞬間だけただの友達です。レディーを苛めるのはいかがかと思えますよ、エド」

こいつは、私がいちいち反応するのを楽しんでいたのか。アステルナータは立ち上がってエディアールの胸倉をつかもうと思ったが、それをセキレイに止められる。

「目の前には私が。隣にはフォックが座りましょう。そうすれば、エドは斜め左に座る事になりますね。いいかしら、アステル？」

アステルナータはそのとき初めて、セキレイが女性だということに気がついた。

「あ……！ 有難うございます、セキレイさん。あなたが女性でほっとしました」

実は、アステルナータは馬車に乗る際、三人とも男性だからどうしようかと思っていたのだ。ただでさえ町の間から変人だと思われていたアステルナータは男子三人と密閉空間に居る事なんて初めてで、どう対処すればいいのかわからなかったのだ。

「そうですか？ ああ、私のことは呼び捨てでいいですよ。それに、今回の事はマイ・ロードが悪いのです。それでも一応優しい方ですから、仲良くはしてあげてくださいね？」

なんだその一応は、とぶつくさ言いながらも、エディアルはセキレイの場所をあけた。アステルの隣にはフォックが座り、馬車は動く。

アステルナータは窓の外をつまらなさそうに眺めているエディアルを見て、喋らなければいい人に見えるのにな、と思った。すると、エディアルはアステルナータの視線に気がついたのか、急にアステルナータの方を向くとにこりと笑う。

「アステル、なんだい？　もしかして僕の目の前がよかつたって後悔しているのか？」

「んなわけないでしょ。　ミスター・エディアル。そういえばなんで私の家に來たのか、理由を聞いていないと思って」

エディアルは残念そうに肩を落とすが、視線はアステルナータを向いたままだ。

「僕のことはエドでいいよ。それより、君の家にいった理由か。それはマイクが君の家を出たのを見かけたからさ。あいつが魔法の残り香を辿って僕達の後を追っているのは分ってた。でも、それだけだったら君に助けてもらう必要はない。僕達はやつがホテルに向かうのを尾行していた時、やつの手下が僕にかけた追跡の魔法はまだ生きていると言っていたのを耳にしたんだ。もちろん、そんなの僕が自分で解けるはずも無い。ただ、その追跡の魔法も漠然とした事しか分らないらしかった。だから僕は君の家に行ったのさ。追跡の魔法を解ける魔法使いは、殆どが郊外に住んでるしよぼよぼの老人だしね」

最後の方は余計だったか、アステルナータは納得するしかなかった。

「以上だよ。他に聞きたいことは？」

「ええと、そうね…なんで、追われているの？　あ、別に詮索する気は無いんだけど、なんで殺人鬼にされちゃったのかなって」

「秘密だよ」

すぐにそう答えられ、アステルナータはそりやそうよね、と呟く。その後もエディアルに様々な質問を浴びせたアステルナータだったが、その答えが半分“秘密”なことに納得した。彼らは狙われているのだ。理由はどうあれ、危険なものなのだろう。

「ほれ、着いたぞお前さんがた。フリガー駅だ」

馬車の運転手がそう叫ぶ。と同時に馬車は馬の嘶きと共に止まった。フォックはすかさず扉を開け、まず荷物を降ろして自身も降りる。そしてその後にエディアルとセキレイが続く。アステルナータも降りようとしたそのとき、不意に今まで大人しかったレバンヌがアステルナータの耳元で囁いた。

「油断するなよ。やつは予想以上に危険人物かもしれない」

アステルナータ驚いて先程までレバンヌが掴まっていた自分の肩を見るが、そこにはもうレバンヌは居ない。かわりに、既に降ろされていたアステルナータの荷物の上にふんぞり返りながら腰かけていた。しかもどうやら姿が見えるようにしているらしい。荷物を持とうとしてくれていたフォックが、手を伸ばしかけて引っ込めた。

「すみませんアステルナータさん。この猫を退かしてくれませんか？ 荷物が運べません」

普段は無口なフォックが、困ったように荷物を見ている。アステルナータはエディアルの手が伸びてくる前に素早く馬車を降り、猫よばわりされて怒り心頭なレバンヌをひよいと持ち上げた。

「その少年！ オレ様を猫呼ばわりとはなんたるぶじょ……あ、なにすんだアステル！」

「ごめんなさいね、レバンヌが意地悪して。もし次もこんなことがあつたら、遠慮なく退かしてくれればいいわ」

「分りました。ありがとうございます」

フォックは礼儀正しく一礼をアステルナータにすると、荷物を持って駅へと入っていった。いつの間にかセキレイはチケットを取ってきていたらしく、一人ひとりに夜行列車のチケットを配ってくれた。そのチケットには、特等席の印字。

「え、特等席！？ これってそんな急に取れるモンなの？」

アステルナータが素直に驚いていると、エディアールがそつと肩に手を置いて言う。

「僕は君のために頑張ったんだよ。二人きりの夜に薄い壁は野暮だろっ？」

「ミスター・エディアール。お言葉ですが私達そんな関係じゃありません。それに、ほら、部屋違うし」

アステルナータはすばやく切り返す。エディアールは驚いて、自分のチケットとこれでもかと思せ付けられたアステルナータのチケットを見比べ、ついでにセキレイとフォックのチケットも見た。そして、どうやら自分はフォックと相部屋になっている、ということに気がつく。

「セキレイ！ 少しは考慮してくれてもなあ！」

セキレイは憤慨している主人を冷静な視線で一瞥する。

「考慮しました。した結果がこれですよ、マイ・ロード。あなたはいささか自重してください」

フォックはあきれたのかそうでないのか、さつさと荷物をホームへと運んでいる。アステルナータはエディアルの視線から逃れるようにフォックの後をついていった。

「ねえ、フォック」

「なんでしよう、アステルナータさん」

列車の到着を待ったためにベンチへと腰かけたフォックの隣に、アステルナータは腰を下ろす。

「結局、特等席って簡単にとれるものなの？」

ああそのことか、と呟いて、フォックは一度自分の主人が遠くに居るかどうかが確かめてからアステルナータの質問に答える。

「ええ、とれます。最近は車や船が流行ってますから、列車の、しかも夜行列車の特等席なんてガラガラなんですよ。最近値段も落ちてきましたし」

「そうなんだ。……あ、もう一つ聞きたいんだけど、いいかしら？」

フォックは頷いて了承する。

「フォックは、ミスター・エディアールのことどう思ってるの？」

アステルナータは純粹に聞いただけだったのだが、フォックはなにか裏があると考えたらしく、途端にアステルナータを鋭く睨む。

「なぜ、そう聞く？」

口調も素に戻っている。アステルナータは相手の剣幕に気がつき、驚いて立ち上がったしまった。

「あ、いや、その……ほら、ミスター・エディアールってなかなか解らないところがあるでしょ？ だから、少し参考にしたかっただけなの」

フォックは眼を見開く。今は見えなくなっただけはいるがいまだアステルナータの腕に抱えられたレバンヌと、アステルナータを交互に見る。そして、首を捻った。

「探っている……わけではない、のですか？」

「え、ええ！ もちろん。私は他人の秘密はあまり探らない主義なのよ」

フォックの鋭い視線から開放されて、アステルナータは安堵のため息を漏らす。

「そうですか。先程は失礼しました。マイ・ロードは……エドは、命の恩人なんです。誰から必要とされていなかった俺を必要だと言ってくれた。根は優しく、芯が強い人なんですよ。それを隠す

ために女性に寄っていたり、お気楽に振舞ったり……まあ、俺もはつきりと知ってるわけじゃないんですが、参考までに」

アステルナータは急に恥ずかしくなってしまった。エディアルのことを本当に尊敬し、大切だと思いながら喋ってくれたフォックに対して、そんなフォックから慕われるほどのエディアルに対しても、なんだか自分が表面だけしか見ていなかったのが不躰に思われたのだ。

「あ、ありがとう、フォック。——隣、座ってもいいかしら？」

自分でも今更、と思いながら、アステルナータはフォックに訊ねる。フォックは頷くと、はにかんだ笑みを見せてくれた。

「どうぞ、アステルナータさん」

アステルナータはそっとベンチに座る。

「私はまだまだダメね。あなたたちのことを、表面上だけで判断しようとしていた」

フォックは眉根一つ動かさず、アステルナータの言葉に耳を傾ける。

「ミスター・エディアルのことを、なんて軽薄な人なんだろうって思ってた。知り合ってまだ一日も経ってないけど、もうそう決め付けてた。魔法使いはどんな人間でも偏見を持たないで見なきゃいけないのに……物事を心から見通すために。少し、見る目を変えなきゃね」

アステルナータは、自分の腕の中に居るレバンヌが居心地悪そうに動いたのが解った。フォックは後ろを振り返ると抑揚をつけないで言い放つ。

「これからは行動に気をつけなければなりませんね、マイ・ロード」

フォックの言葉に驚いて、慌ててアステルナータも振り返る。そこには楽しそうな顔をしているエディアルとセキレイが支柱の傍に立っていた。

「ああ、そうだな。アステル、君が僕のことをそう思い直してくれて嬉しいよ。どうだい、今夜はお互いの事をより深く知る為に、同じ部屋にしないかい？」

エディアルはフォックのチケットを取り上げ、アステルナータに差し出す。

「さあ、一緒に夜を明かそう？」

最後のとどめの一言で、アステルナータは先程までのエディアルへの考え方を一気に総否定した。

「なっ・・・！ あなたって人は！ 前言撤回、やっぱりあなたは軽薄な男よ！」

アステルナータは肩を怒らせてレバンヌを荒々しく抱えながら、ベンチを離れて柱の傍に行く。

その時、アステルナータの視界の端に、薄笑いを顔に貼付けた男がチラリと過ぎった。

（な、なにあの男……）

アステルナータは辺りをキョロキョロと見渡して先程の男を捜したが、アステルナータの視界に男が入ることはなかった。

（気にしすぎかしら。それとも疲れてるのかも。今日はさんざんな一日だから……）

思えば、今日はアステルナータにとって激動の一日だった。変人だと言われ続け、店もまともに切り盛りするほどの客が全く入らない生活とは裏腹に、初めて会う男性が二回も店に訪れ、しかも依頼主と汽車で逃亡しようとしているのだから。

「ほんと、疲れたわ……」

レバンヌは、そのアステルナータの呟きに答えて、こくこくと頷いた。

「今日は厄日だと思う？ それとも、人生の転機？ とにかく眠りたい気分ね。まだ汽車は来ないのかしら？」

「きつと今日は厄日だぞ、アステル。フツの日常からこんなにもかけ離れたんだからな。さて、汽車は三十分後くらいに来るんじゃないか？」

レバンヌの予想通り、汽車は三十分後、駅に到着した。フォックとセクレイが荷物を、泊るコンパートメントへと運び込み、アステルナータはエディアルのエスコートをしぶしぶ受け入れ、自分が泊るコンパートメントの前へと到着した。

そのコンパートメントは、さすが特別席だけあって、一つの車両を半分埋め尽くした豪華で、広々としたものだった。シャンデリアはついていないものの、気品漂う絨毯と壁紙、そして固定されている家具たち。その一つ一つに美しい装飾が施されていて、さらに部屋の豪華さを引き立てていた。

「うわぁ……！　すごくステキな部屋ね。お金持ちのお嬢様になった気分だわ！　ミスター・エディアル、あなたいつもこんな豪華絢爛な部屋に泊っているのね。羨ましいわ……」

アステルナータがそう言うと、エディアルは少し困ったように笑う。

「そんなことはないよ。それと、アステル。今後は素性は少しでもばれないように、“ミスター”を付けるのをやめてくれないかな？　表向きは逃避行している恋人なんだし？」

「は？　いや、“ミスター”をとるのはいいけど……私達、逃避行している恋人なの？」

エディアルは得意顔で頷いた。

「ちょっと、冗談でしょ！？　百歩譲って妹よ！」

結局、腹違いの兄妹ということで決着し、アステルナータはエディアルの事を“エド”と呼ぶ事を余儀なくされた。

「まあ、恋人よりはマシって事で」

駆け引きの一部始終を見守っていたレバンヌは、そうアステルナータに話しかける。

「そ、そうよね……恋人になんかなったら、多分一緒の部屋にゝなんて言っただに違いないわ」

アステルナータはもうこのコンパートメントに居ないエディアルを睨んだ。

「ほんと油断もすきもないんだから。あ、レバンヌ、少しいいかしら」

アステルナータは先程見た怪しげな男のことをレバンヌに話し、できれば汽車に乗り込んでないか確かめて欲しい、と頼んだ。レバンヌはその頼みをいやいや受け入れ、さっさと何処かへと消えてしまった。その瞬間、部屋にセキレイが入ってくる。

「もうすぐで出発のようです。加速の時に揺れるので、どうぞソファに座ってください」

セキレイがそう勧めるので、アステルナータはソファに深く腰かけた。セキレイはアステルナータの隣へ座る。丁度そのとき、先程出て行ったばかりのレバンヌが帰ってきた。レバンヌはアステルナータの膝の上に飛び乗ると、一言、言い放った。

「男が一人、ギリギリで乗ってきた。……マイクだ」

追っ手が来た。アステルナータとセキレイは顔を見合わせ、二人とも真っ青な事に気がついた。

「は、早くエドに報告しなきゃ！」

「ええ。けれど、まだ出発していないわ。迂闊に立ち上がれないもの……」

そのとき、二人の視線は同時にレバンヌのほうへ向いた。もちろんセキレイは見えていないので、居るはずの方向を向いただけだが……それだけで、レバンヌの重たい腰を動かすには十分だった。

「ちえ、わかったよ。そのかわり、あとで美味しい缶詰をくれよな」

TALES OF 【暗闇と変装】

レバンヌの報告を受けたエディアールは、汽車が出発して速度が安定するとすぐにアステルナータとセキレイがいるコンパートメントへと入ってきた。もちろんフォックも一緒だ。

「まずいな、こんなに早く気付かれるとは思っていなかった。今晚くらい、ホテルでのんびりしていてくれないものなのかな」

「おそらくは、部下が見張っていたのでしょう。……迂闊でした」

アステルナータはソファに座ったまま、立ち上がっている三人を見上げる。レバンヌは再びアステルナータの膝の上を陣取り、現在は姿が見えるようにしていた。自分も話に加わるためだ。

「マイクは、ほとんど駆け込みだったから最後尾の車両に飛び乗ったはずだ。あんた方はもちろん、今は協力者としてアステルも探してるんじゃないか？ 次の町で降りたとしても、それまでの一時間を乗り切れるか？」

「そ、そうよね……。きつとこの汽車のコンパートメントを探し回るだろうし。あ、姿を隠す魔法は、高度すぎて私じゃとても。魔術も、ここじゃ無理だと思うわ。……先に言っておくけど」

エディアールはアステルナータの方を向き、頷く。そして神妙な面持ちでフォックの方を見た。

「やつは、今の僕の格好を知っているに違いない。そこで、目を欺く必要があるのだけれど……成功すると思うかい？」

フォックは一瞬考え込む。

「成功の可能性はありますが……まさか、アステルナータさん？」

そう訊ねられたエディアルは、首を振って否定した。

「いや、……全員だよ。あ、レバンヌは含まれてないからね」

エディアルの言葉に、いまいちついていけないアステルナータは、首をかしげた。

「だ、だからって！　なんで私がエドの服を着なきゃいけないのよー！」

「仕方が無いだろう？　変装でもしなければ、いずればれてしまう」

エディアルが考え出したのは、服装を取り替えて別人になりますというものだった。余分な服はアステルナータの着替えしかない。

「身長が合わないわよ！　私はフォックと交換するから、エドはセキレイと交換すればいいじゃない」

「……マイ・ロード。その方がいいかと思います」

セキレイはそう言い、エディアルを隣のコンパートメントへと

追い立てる。

「どうせなら、アステルの服でもいいと思うぜ？ そんな燕尾服着ても、やっぱりバレルだろ」

レバンヌが二人の後姿に声をかける。ついでに、本人が望んでいたことなんだしな、と皮肉を交えるのも忘れない。

「それもそうですね。マイ・ロード、異論は？」

「……ないよ、セキレイ」

アステルナータはフォックの燕尾服を着たまま、ソファに腰かけていた。長い髪は低い位置で縛つてある。アステルナータの着替え用の服に身を包んでいるフォックは、部屋にもともと設置されている鏡の中の自分と睨みあっていた。

「似合つてると思うんだけど……。ねえ、レバンヌ？」

「オレに聞くな」

似合う似合わないの問題ではないことは解っていたのでなにも言えずにしていると、エディアルが先程まで着ていた服に身を包んだセキレイが、アステルナータのいるコンパートメントに入ってきた。

「エドの着替えはすみしました。フォック、エドの所へ。アステルは私と一緒に。よろしいですね？」

フォックはできれば外には出たくないという表情をしながら、出て行った。セキレイはアステルナータの座るソファの向かいにある一人掛け用のソファに腰かけた。

「一応、エドと考えた作戦を話しておきます。あらかじめ、扉には就寝中という札はつけてありますが、追っ手のはじめにこのコンパ―トメントに入ってくることを想定して、私はアステルの執事のフリをして、隣のコンパ―トメントは淑女二人が寝ていることを伝えます。話の流れにより、一度隣も僅かに覗かせます。そして納得してもらい、帰るよう促します。なにかご質問は？」

アステルナータは一度頭の中でセキレイの言った事を整理し、そして訊ねる。

「さっきから、エドって呼んでいるのはなぜ？」

的外れなアステルナータの質問に、セキレイは苦笑した。

「それは、エドが今は主人じゃなくて、ただの淑女だと仰ったからです。ちなみに、偽名はエリアーゼです」

「私はたしかアリオンだったわね。それで、セキレイがセレウス、フォックがフェアア……よね」

「ええ、そうです」

実際に呼ぶ機会はなさそうだとは思いつつ、アステルナータは忘れないようにしようと努める。

「それと、私は姉妹二人と帰宅途中の兄っという設定だけど、本当に何も喋らなくていいのね？」

「アステルは声も顔も知られているでしょうし、なにより、男性のように喋るのは苦難かと」

セキレイはアステルナータをよく解っている。アステルナータは安堵した。

アステルナータがベッドの上に横になり、できるだけ頭まですっぽりと布団をかぶり寝ているフリをしていると、突然、扉がノックされた。それだけで心臓が高鳴るアステルナータを安心させようと微笑んだセキレイが、そつと扉を開ける。

そこには、案の定マイクが立っていた。しかも、相当量のコンパルトメントを見てきたせいなのか、僅かに苛立っている。セキレイは笑顔を作った。

「なにか、我が主にご用が？」

マイクは頷き、簡単な理由を述べる。

「実は極秘任務で人探しをしているのですが、金髪で長髪の男性を見かけませんでしたか？」

「いえ、まったく。すみませんが我が主は就寝中なので、できれば明朝お越しいただけるとありがたいのですが」

セキレイが丁重にお断りしたにもかかわらず、マイクはどうしても中に入って、少しでも探させてもらう事はできないかと頼み込んだ。もちろん執事の独断ではそんなことはできない。

「……では、隣の部屋は？」

「隣は、我が主のご姉妹がご就寝なされております。とにかく、主の睡眠を妨げ、さらにはプライバシーの侵害を手助けするつもりはございませんので、主がお目覚めになるまでお待ち下さい」

セキレイはぴしゃりとそう言い放ち、マイクは断念したのかこの車両を去っていった。セキレイはその背中を見送り、そしてコンパートメントの扉を閉めた。

「アステル、とりあえずは安心していいかと。あとは、次の町に着くまでにどうするか考えましょう」

アステルナータは布団から脱出し、ベッドの端に腰かける。

「レバンヌ、エドに連絡をお願いできる？」

レバンヌは美味しい缶詰を交換条件に、エディアルのもとへと連絡しに行く。しばらくして、着替えを持ったエディアルとフォックが、変装した姿のままコンパートメントに入ってきた。

アステルナータの寝巻きに身を包むエディアルは、髪をおろしているという事もあり、背が高いだけの美少女に見えた。一方のフォックは、やはり不機嫌な顔をしていた。

> i 3 4 4 6 — 5 5 3 <

「うわあ、なんだかエドに負けたような気がする……。なにがとは言えないけど……」

「アステルは、何を着ても似合うね。燕尾服姿もなかなかいい」

エディアールの軽口は無視するとして、アステルナータはレバンヌの姿を探した。が、しかしレバンヌはどこにも居ない。

「エド、レバンヌはどこへ？」

「レバンヌなら、僕からの依頼でマイクの行動を監視しているよ。高級チョコレートと引き換えにね」

食い意地がはっているレバンヌは、きっと自分の気がそる食べ物と引き換えならどんな仕事でもするのではないかと、たまにアステルナータは思う。レバンヌがマイクを監視してくれるのはとてもありがたいのには違いないのだけれど。

「予定が狂っていないければ、あと十五分で次の町へと着きます。その町では十分停車し、その後はノンストップで終点へと向かいます。レバンヌが何かこちらに不利な情報を仕入れてこない限り、その十分の停車時間を利用して、窓から外へと脱出しましょう」

「残念、その不利な情報だぜ」

とつぜん声がしたかと思うと、扉の前にはレバンヌが二本足で立っていた。

「どうやらマイクはこの車両が一番あやしいと思っている。朝まで踏み込むつもりは無いらしいが、万が一のことも考えて見張るんだそう。どこから見張るかまでは言っていないかったが、まあ、たぶん次の町で下車できないようにするつもりだろう。ちなみに、終着駅には部下をわんさか送り込むようにと無線電話機で喋っていたぞ」

それを聞いた全員が、渋い顔をした。

「窓から逃げたとしても、すぐに気付かれるだろうね……」

エディアールがそう呟く。セクレイもフォックも同意を示した。アステルナータは深く考え込むように、口元を掌で覆う。

「もし、偽装できるなら、どう？」

「偽装？」

エディアールはアステルナータに聞き返す。

「ええ、そう。例えば、どちらかの部屋の……そうね、クローゼットのなかからでも、怪しい音がしているってマイクさんに嘘をつくの。そうして、マイクさんの注意をひきつけることはできないかしら」

アステルナータは言うてから、この数時間で自分に悪知恵ができてしまったのではないかと思ってしまう。よくよく考えれば自分は無関係なはずで、エディアールが目の前に現れた時から、色々間違っているような気はするのだ。しかし今マイクに捕まりでもしたら、間違いなく監禁されるだろう。アステルナータは結局保身のために、エディアール達の逃亡を手助けしなくてはならない状況に追い込まれているのだ。

「できる……と思う。隣のコンパートメントのクローゼットの中から音がしていることにしよう。それで、姉妹が気味悪がっているから、かわりに見てくれないかと持ちかける」

「でしたら、出発間近にそう持ち掛けましょう。そうすれば、上手

く逃げ出せた時には汽車は出発しているでしょうし」

「そうだなセキレイ、それがいい。次の町には運河が通っている。今夜はホテルにでも宿泊して、服なんかを着替えて変装して行こう。移動手段は船になるが、まあ……大丈夫だろう」

アステルナータは頷いて、その作戦に同意したことを示す。それをエディアルは確認して、手を一度打った。

「さて、それじゃあ着替え直そう。なんせこんな格好じゃあ動きづらいからね」

とりあえず、もう隣のコンパートメントには何も荷物は無いので、全員がここで着替える事になった。まず初めはアステルナータ、そしてフォックが、エディアルが着替える。しかし、完璧に着替え直したアステルナータやフォックとは違い、エディアルは上着をセキレイから返してもらおうとはしなかった。

「なぜ、上着を着ないの？」

「それは、セキレイがさつきとは違う格好をしてマイクに会いに行ったら、疑われるかもしれないから。それだけだよ」

「ああ、そういえばそうよね。わかったわ」

アステルナータは理解し、頷く。丁度その頃から汽車は減速を始めていて、もうそろそろで町に着くというアナウンスが流れていた。

「作戦決行は丁度二分前になってからだ。フォックはアステルの荷物を。僕はアステルを守るから、よろしく。セキレイはやつが隣の

コンパートメントに入った瞬間こちらのコンパートメントに入り施錠をして、そして後を追う。もしはぐれた場合の落ち合う場所は、駅の外にある大きな時計塔の正門、中央街にあるハトの石像の前、今夜宿泊するホテルのいずれかだ。まあ、アステルは覚えなくても、僕がしっかりエスコートするから大丈夫だよ」

そう言つて、アステルナータに向かってウインクしてみせるエディアールは、頼もしいのだから頼りないのかわからない、とアステルナータは思う。

「一番は僕だ。二番目にアステル。三番目にフォックという順番で窓から出よう。……もう止まるよ」

エディアールがそう宣言した途端、本当に汽車は止まった。それから十分間の休憩に入る旨が放送で流れ、エディアールが懐中時計で時間を確認する。アステルナータの鞆はフォックが用心深く持ち上げた。

「さあ、あと一分だ」

エディアールが呟く。あと一分しかないという事実にも身を固めたアステルナータの肩に、不意にレバンヌが登った。姿は見えないようにしてあるので、誰も気が着いていないようだった。

「ど、どこ行つてたのよ？　なんか姿が見えないと思つていたら……」

「親切にマイクの行動を見張つてたんじゃねーか。あいつらが捕まろうとオレの知ったことじゃねーが、あいつらが捕まると高級チヨコの約束が長引きそうなんだな」

「まったく……レバンヌはもう少し自分の身の振り方を考えた方がいいんじゃない？」

アステルナータとレバンヌがこそそと話をしているうちに、時間が来てしまった。

「時間だ。さあ、行こう」

「あつ、うん」

アステルナータは引つ張られ、窓際へと近寄る。エディアルは軽い身のこなしで飛び降り、軽やかに着地した。

「さあ、おいでアステル」

自分にむけて手を伸ばすエディアルを見下ろしたアステルナータは、一瞬こいつに身を預けてもいいのだろうかと思いつたが、そんな時間が無い事は分っていたので、心配事はこの際考えなかった事にして、思いつき窓から飛び降りた。アステルは恐さのあまり目を瞑ってしまったが、ふと目を開けると、目の前にはエディアルの整った顔があった。

「うつ……は、早くおろして」

「わかった。お気をつけて、レディ」

アステルナータはゆっくりと砂利の上に降ろされた。アステルナータが後ろを振り返ると、今まさに窓を飛び越えたフォックが、着地したところだった。

「さあ、あとはセキレイだけだ……」

エディアールは緊張しているからなのか、声を強張らせる。その時、急にエディアールの前にフォックが歩み出て、エディアールにアステルナータの鞆を手渡した。

「少々てこずっているようなので、手伝いを」

そう言つて窓からまたコンパートメントに入つていったフォックは、アステルナータから見てかなり緊張している面持ちだった。たぶん、少々てこずっているところではないのだろう。

それはエディアールも承知したのか、だまつて歩き始めた。アステルナータの手を引くのは忘れない。

「あ、あの、二人を置いていってもいいの？」

「僕は、あの二人を信用している。再び僕の前に生きて現れるつてね」

エディアールはそう言つと、これ以上の会話はなしだという意味で、立てた人差し指を自信の唇に当てると、アステルナータに頷いてみせる。

アステルナータも意味をなんとなく理解して、頷き返した。

二人は早足で汽車の最後尾の車両を迂回し、そして駅ホームへと登れる階段を登ると改札口で切符を見せ、終点で降りるはずがこの町で降りなくてはならなくなった訳を適当に誤魔化し、口止め料としてチップを払う。駅員は頷いて改札口を通してくれ、エディアールは再びアステルナータの手を引いて普通で歩き出した。

深夜だということもあり、閑散としている駅前通は、恐怖心を煽

るのにはもってこいだった。

「ねえ、あの二人大丈夫かしら？ 私たち……逃げ切れるわよね？」

つい喋ってしまったアステルナータを責めるわけではなく、優しく微笑み返して、エディアルは返事を返した。

「大丈夫。なんせ僕がついているからね。——ほら、後ろをご覧ください」

そう言われて後ろを振り返ったアステルは、二人の黒い召し使いが駆け足で近寄ってくるのを見た。

TALES OF 【川面と船】

フォックとセキレイが合流してから、なぜかエディアールはホテルにチェックインしようとしなかった。アステルナータが何故かと聞いても、エディアールは「念のためだよ」と言っ、アステルナータには全て教えてくれなかった。

ただあても無くブラブラと、街灯しかともっていない真つ暗な街道を歩いたり、急に細い路地に入っと思ったら水路沿いを歩いたり、アステルナータには全てが理解できなかった。それはレバンヌも同じなよう、珍しくアステルナータの隣を四本足でててくと歩き、尻尾は不機嫌そうにピクピクと動いている。

暫く暗闇を歩き、エディアールは突然立ち止まった。アステルナータもあわてて立ち止まる。

「あの、エド？ どうしたの？」

アステルナータがおずおずと聞くと、耳をそば立てていたらしいエディアールは、にんまりと笑みを零した。

「ほら、聞こえないかい？ 十二時の鐘が鳴ったよ」

たしかに、耳を澄ませると、遠くからかすかに真夜中を告げる鐘が鳴っていた。

「あ、聞こえたわ。でも、鐘がどうしたの？」

「僕にかかっている追跡の魔法が、真夜中の十二時を境に一回効果

が薄れるようなんだ。けど、日が昇るまでにはまた復活するんだけどね。念のため、そのタイミングを待っていたんだよ」

「マイ・ロード。このままホテルに泊まるのは危険です。すぐにも、船で移動しましょう。服などは、最寄の港町で購入したほうが……」

セキレイの言葉をさえぎって、エディアールはホテルがあった方角とは反対方向を示す。

「あっちの方に、例の老人がいるはずだ。覚えているよね？ その人に、船の用意と保存食料を頼んである。先に行って、準備してくれ」

「了解しました。偽名は、どれを？」

「男爵の方を。それで通してあるから」

エディアールの言葉に頷いて、セキレイは闇に消えていく。

「男爵？ あなた、男爵なの？」

エディアールのことは貴族だとは思っていたけれど、爵位は知らないという事に、アステルナータは今更気がついた。アステルナータが質問すると、エディアールは困ったように頬をかく。

「いや、男爵じゃないよ」

「えっ、じゃあ……？」

「偽名の一つだよ。こうやって色々狙われていると、本名では生きていけないからね。ちなみに、爵位はまだないよ」

まあそれもそうか、と納得しつつ、アステルナータは一つの疑問を抱く。

「貴族じゃない、ってことなの？」

「まあ、今はね。これから手に入れるんだよ。……それは、おいおい説明してあげるから、今は船の方に急ごう。歩きながら、色々話すこともあるしね」

アステルナータはしぶしぶ頷く。しかし、レバンヌは納得がいかないともいうように一つ鳴いた。

「勘弁してくれ、レバンヌ。今はまだ、説明できないんだよ」

フォックが先頭を歩き、アステルナータとエディアル、そしてレバンヌは、その後を歩きながらこれからどうするのかを簡単に話しながら歩を進める。

「今回僕が使う偽名は、ディーン・マクレイア男爵っていう。まあ、できるだけ名前を呼ばないようにしてくれれば問題ないんだけど」

「わかった。それで、最寄の港町まで、その船でどれくらいかかるの？」

「そうだね……。最低でも、明け方までには到着するよ。あと、質

問は？」

「その港町から目的地まで……やっぱり、遠回りになるのかしら？」

「それは、実はもしかしたら遠回りにならないかもしれないんだ。まあ、現地に行ってみないとわからないんだけどね」

到着しました、とフォックが言う。エディアールは頷いて、プレハブ小屋の中にいる老人のもとへと歩み寄った。

「やあ、久しぶりだな男爵様」

その老人は、一見ただの浮浪者にしか見えない服装をしている。アステルナータは失礼にならない程度に老人を観察してみたが、これといって不思議な点はなかった。

「僕の従者が伺ったはずだけれども、準備は出来ているのかな？」

老人はにつこり笑って頷き、近くの棧橋を指差した。

「ああ、出来ているとも。必要な荷物も入れておいた。操舵手はいらないんだっただよな？」

「ありがとう、また頼むよ。例の場所に報酬は置かせる。あとで取りに行ってくれ」

エディアールはそう言つて、老人のもとを離れる。フォックは何かをエディアールから受け取り、どこかへと行ってしまった。

「さて、船に乗り込もう。セキレイ、アステルを任せた。僕はちょ

つと取りに行くものがある」

アステルナータはいつの間に居たセキレイに連れられ、棧橋を渡り船に乗り込む。小型クルーズ船のようなかんじだが、暗闇で全体が見えない。とりあえずと案内された船内は、豪華だった。

「こんな、豪華な船……。よく準備できるわよね……」

僅かなランプの明かりで船内を見渡しても、上流貴族が使うホテルの小室のようにしか見えない。

「荷物はここに置いておきますので。エディアル様が戻られて、出発するまで外には出ないようにしてください」

セキレイはアステルナータにそう告げて、自身は操舵室へと向かってしまった。

「見たところ、この部屋しかないのよね……。レバンヌ、ちょっといい？」

「えっ、なんだよ……。オレはもう眠いんだが」

アステルナータの目の前に現れたレバンヌは、たしかに眠たそうだった。とりあえずと思い、アステルナータは備え付けのソファーに腰掛ける。レバンヌはとっさに、アステルナータの足の上に飛び乗った。

「エドって、やっぱり怪しいわよね……。貴族だと思ってたのに、違うつてどういことなのかしら？ あと、これから爵位を手に入れるとかなんとか……」

「まあ、たしかに怪しいけどな。それより、いつの間にかエドと呼んでるぞ？ いいのか？」

アステルナータは言われて初めて、自分が愛称で呼んでいることに気がついた。思わず口に手を当てるが、あきらめたように肩をすくめる。

「……もう気にしないわ。向こうもなにも言っていないだし、なにより、まだまだ一緒に居ることになりそうだし」

ふうん、とレバン又は頷き、眠たそうにひとつあくびをする。

「……色々探しても、わからないなら……やっぱり、本人に聞くしか……」

アステルナータは喋りながら、段々眠りに落ちそうになる。うとうととしているうちに、今までのことを頭の中で思い返していた。事の始まりは一通の手紙だったのね。あの手紙が届かなければ、私は家に居て、ベッドで寝ているのかしら。それが、エドについていけないでいたら……。

エドはマイクさんの手によって、捕らえられていたのかしら。

そんなの……ダメよね。

私にはどっちが正しくてどっちが悪いなんてわからないけど。けど、やっぱり放っておけないって思ってたのかも。

お人よしよね。きつと、とんでもなく。もしかしたら、悪いほうに加担してるかもしれないのに……。

「ん、ああ、寝ちゃってるのか。疲れてるだろうし、寝かせてあげ

よう」

エドの声が、聞こえたような気がする。気のせいかも？……どうなんだろう。

「さあ、マイ・ロード。少しお休みになってください。もう随分寝ていませんよ」

今度は、セキレイの声……？ 戻って……？

「けれど、女の子と一緒にの部屋じゃあ、君が安心できないんじゃない？」

「なら、フォックが間に居ればいいでしょう。マイ・ロード、あちらのソファでお休みください」

エディアールは、アステルナータが寝ているソファの隣にあるソファに座る。そして背もたれに深く身を沈めた。

フォックはエディアールの隣に座り、どこを見るわけでもなく前を向いている。

「フォック、交代時間になったら起こしますので、寝ていていいですよ」

セキレイはそう言い、また操舵室へと戻っていく。

「いいのでしょうか……？」

「いいと思うよ。十分睡眠をとらないと、いざとなった時になにもできないからね」

おそろおそろ頷いて、フォックは目を瞑る。エディアルは満足そうに頷いて、自分も目を閉じた。

気がつけば、アステルナータは深い眠りに落ちていった――。

夢で自分の過去を振り返ることは、そうそうあるものだろうか。僕はよく見てしまう。

思い出すというか、その現場を見ているというか。

夢の中で、ふと考えてしまう。

あの少女を巻き込んでよかったのだろうか。

今、僕は知らない外国の路上にいる。夜の街は恐ろしく寒い。ぼろぼろの毛布に包まりながら、その時には知り合っていないはずの、少女のことについて考える。

あの少女は、今のところついてきてくれるが、僕たちの素性を知ってしまったら逃げていってしまうのだろうか。

僕たちには見えない何かに乗って、帰ってしまうのだろうか。

僕は、少女をただいたずらに巻き込んでしまっただけかもしれない。

最低な人間だと思われるだろうか。

もう、そんなことを気にするのは可笑しいのかもしれない。

きつと、僕が過去にこんな経験をしたことがあるなんて漏らしたら、同情を買うつらいならできるのだろう。

けれど、なるべく彼女には深入りしてほしくない。

隣でうずくまって寝ている二人を見て、自然と頬が綻ぶ。

この頃は、生きるのに必死だった。二人を守るために色々なことをやった。

いや、今もそうかな。

僕にはもう、この二人しか居ないのだから……。全力で、守るんだ。

アステルナータは、ふと目覚めた。船はゆっくりと進んでいるらしく、ぐらぐらと揺れている。レバンヌはぐっすり眠っていた。

窓の外に目を向けると、そこはまだ暗い。朝もやのような感じが時折窓ガラスを撫でてゆく。

ふと隣のソファを見ると、そこにはセキレイとエディアルが眠っていた。

じゃあ、今操舵しているのはフォックなのね。

アステルナータは、夢現に聞いていた会話は夢ではなかったのだと納得する。

少し風に当たりたくて、申し訳ないと思いながらレバンヌをソファにおろし、船室から甲板に出る。船にはところどころランプが灯っていた。

「これは、旧式の船だったのね」

アステルナータが独り言を言うと、操舵室にも声が届いたらしく、フォックが返事を返してきた。

「最新のものの操舵は、慣れませんから」

アステルナータは慣れた手つきで舵を取っているフォックの隣に並ぶ。

「電気で動いてるんじゃないのね」

「ええ。アステルさんは、詳しいのですか？」

まさか、とアステルナータは首を振る。

「ちょっとかじっただけよ。この前乗った船が電気で動いていて、それを船長が得意げに自慢していたから聞いちゃったの。ただそれだけよ」

そうですか、とフォックは頷いて、それ以上は何も喋ることはないとでもいうように舵を切る。

アステルナータは少し気まづくなって、遠くを見る。心なしかあたりが明るくなっているような気がする。

「あら、もう夜明けなのかしら？」

「たぶんそうですね。もうそろそろで、港町に到着しますよ」

フォックは自分の胸ポケットから懐中時計を取り出し、現在時刻を確認する。

「すみませんが、マイ・ロードを起こしてきてはもらえませんか？」

「え、ええ、いいけれど……」

私は仕方なく、エディアールを起こすために船内に行こうとする。すると、もう既に入り口にエディアールが立っていた。

「あ、エド……。おはよう」

「ああ、おはよう。ずいぶん、フォックと楽しげに喋っていたね」

「えっ？ そんなことは……。だいたい、そんなこと関係ないじゃない」

エディアールは薄いシャツのままアステルナータの傍によると、強引に腕を引っ張った。

「ちょ、ちよつと、引っ張らないでよ！」

アステルナータが抵抗しても、エディアールに敵うはずもなく船尾の方に連れて行かれた。

「なんなのよ、もう」

「ちよつと心配だったんだ、実は」

急に喋りだしたエディアールは、寂しそうな表情をしていた。

「え？」

「目が覚めたら、君が居ないんじゃないかって」

「そんな、まさか……。私は水中人^{マービール}じゃないんだから」

「全部僕の杞憂だっというのは解ってるんだけど……、でも、僕は君に対してあまりにも隠し事が多いだろう？ だから、君が疑っているのも仕方がないことだと思ってる」

柔らかな風を受けて、エディアールのシャツがなびいている。いくらもう春だからとはいえ、さすがに寒そうだななんて、場違いなことをアステルナータは思っていた。

「もしかしたら、君が僕らの思い浮かばいような方法で僕らの隠し事の真相を知ってしまったって、僕が弁明をする前に、ペガサスに乗って帰ってしまうんじゃないかなんて、考えてしまっんだ」

くるりとアステルナータに背を向け、川面を眺めるエディアールの背中では、小さな子供が何かにおびえているような感じがした。アステルナータは少し同情の意を向けながら、おずおずとエディアルに尋ねる。

「ねえ、寒くないの？」

するとエディアルは驚いたようにアステルナータの方を振り向き、クスクスと笑った。

「ねえ、それって話題を逸らしたの？ それとも、素で？」

「そ、そういうつもりじゃ……。なんていうかその、寒そうだなって。……………ねえ、あれ、水中人じゃない？」

アステルナータが気まづくなつて川面に視線を動かすと、そこには半漁人の生物が上流目指して泳いでいた。

「マーピール？ 僕には見えないけど」

アステルナータはエディアールの隣に立ち、川面にいる水中人に話しかけた。

「ねえ、あなた達。ちょっと聞きたいことがあるの。いいかしら？」

水中人は、見た目は人間と同じようだが全身にうろこが生えていて、青白い。顔もどこことなく魚のようだ。

アステルナータの呼びかけに答えるように、一人の水中人が船の近くにやってきた。

『ギャ———！』

「うっ。あ、あなた達の中には、陸でも人の言葉を話せる者はいないの？」

『ギャ———！』

アステルナータはため息をついて、自分が羽織っていたカーディガンを脱ぐと、ぽかんとしているエディアールに手渡す。

「ちょっと持っていてくれないかしら？」

そして、靴を脱ぐと思いっきり川の中に飛び込んでいった。

「……あ、ちょっと！？ 大丈夫かいアステル！？」

一瞬送れて反応したエディアールは、アステルナータ助けようと自身も飛び込もうとするが、水面に浮かんできたアステルナータが

それを止めた。

「大丈夫だから！　ちょっと水中人と話してくるだけ！」

そう言つてまたもぐるアステルナータを見送り、エディアールはあっけにとられてしまった。

「まいったな……。おい、フォック！　一旦船を止めてくれ！」

フォックは言われるままに、船の動力を止める。するとこの騒ぎで起きてきたのが、レバンヌとセキレイがエディアールのそばに走り寄ってきた。

「おいおい、何が起きてるんだ？」

「何か困ったことでも？　そういえば、アステルさんが見当たりません……」

「ああ、なんだか水中人っていうやつらと話すために、飛び込んでいったよ」

エディアールが指差す水面に、ぶくぶくと気泡が上がってきている。それを確認したレバンヌは、チツと舌打ちした。

「まーったくアステルは、すぐこれだからなあ」

「おはよう、水中人。ところで、あなたに聞きたいことなんだけれ

ど」

『……水の中に飛び込むなど、昔の魔法使いでもやらなかった。そなた、変わっておるな、そして若い……』

「え、ええ……。そ、それより、この時期はまだ比較的水温の變化のない深い海いのそこに居るんじゃないの？」

『本来ならば。しかし、我らにとって脅威となるものが、いずれ現れる。その時に備えて一族総出で山の上の湖に避難することにしたのだよ。あそこならまだ人の手も及ぶまい』

「な、なるほど……。あの、その湖って魔界の扉の近くなの？」

『知っておるのか？……たしかにそうだが、魔法使いの娘よ、そなたも母のようにになりたいのか？』

「か、かあさまを知っているの！？ やっぱ、魔界の扉って……」

『……余計なことだったようだな。そなたも、脅威が現れる前に身を潜めた方がいい。そのうち魔に属するものは皆追われる運命になるだろうからな。……さらばだ』

「えっ、待つて！ かあさまの事を教えて！ ねえ！」

アステルナータの叫びもむなしく、水中人はもう水のにのりの向こう側へと行ってしまった。あきらめて、アステルナータは水面に顔を出す。深呼吸すると肺が勢いよく膨らみ、思ったより長く水中にいたことがわかった。

「おい、アステルー！ こっちだ、来れるか？」

少し遠くに見える船の上から、手すりに立ってレバンヌが手を振っている。その隣にはエディアルとセキレイが不安げにこちらを伺っていた。

「今行くわ！」

アステルはもう一回深呼吸をすると、船に向かって泳ぎだした。

「まったく、君には驚かされるよ」

「ご、ごめんなさい……ハクシヨンッ！」

「あーあ、ほら、ちゃんと髪の毛も拭けよ」

アステルナータはいわれた通りに髪の毛を拭く。先ほど着替えは済ませていて、服などはアステルナータが必死になって魔術を施し、結果生乾きのままトランクとは別の麻袋に押し込まれている。

「ほんとごめんなさい。少し、水中人に聞きたいことがあったもんで……」

「僕にはひきつった叫び声しか聞こえなかったけど、君にはちゃんと言葉に聞こえるのかい？」

「ええっと、水中人は水の中でなら会話できるのよ。空気中では言

葉は言葉の形を成さないっただけで。水中人語をマスターすれば、陸でも会話が出来るようになるわ。ただ、こっちも叫び声のような言葉になるわけだけどね」

エディアールは、あきれたように肩をすくめる。

まあ、その反応も当たり前なのだろうとアステルナータは思った。花も恥らう乙女なはずの娘が、男の人の目もはばからず自ら水中に飛び込んだのだ。

あきれないほうが不思議である。

「マイ・ロード。もう棧橋に停泊できます。そろそろ下船できる準備を」

「ああ、わかったよ……。それで、君がそこまでして水中人に尋ねたかったことって、なに？」

やっぱり、聞かれるわよね。アステルナータは心の中でため息をついた。

こんなやつに、正直に喋っていいのだろうか迷う。レバンヌはもとも知っているの、あえて追求はしてこないけれど、エディアールは違うのだ。

「ごめんなさい。あの……喋れないわ」

「なぜ？ 僕が信用できないから？」

「そういうんじゃないっつて！ あの、身内の問題なの」

数年前にいなくなってしまった母の足取りを探すため……なんて、こいつに話してもきつと仕方のないこと。それに、できれば他人に

は知られたくない話でもあるのだ。

「ふーん……。って、納得すると思った？ 今は無理でも、いずれ話してよね」

自分のことは棚に上げて、よく言っわと思う。

「じゃあ、あなたの秘密と交換ね」

きっとそう来るだろうと思っていたのだろう。エディアールはニヤリ、と笑った。

「ちょっと、なにその不気味な笑いは！」

「いいや、何も。さて、色々準備しなくちゃね」

「あ、もう！ これだから信用できないのよ！」

エディアールは甲板へと出てしまい、レバンヌと残されたアステルナータは顔を見合わせた。

「ぜったい何か企んでますって顔だったな」

「ええ……。注意しなくちゃ」

それを扉越しに聞いていたエディアールは、悲しそうに微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9274e/>

魔術師と貴族 ～逃亡者は殺人鬼！？～

2010年10月10日05時33分発行